

無きに等しいものをあえて選ばれる神

神がご自信の栄光をあらわすために用いられる方法は、人間のそれとは異なっていることを悟ることは何と大切なことであろうかと思う。かつて、エルサレムの宗教的指導者たちは、サンヘドリン（ユダヤ最高議会）の前に立つガリラヤの漁師出身のペトロとヨハネを「無学のただの人」と言って軽蔑したが（使徒言行録4：13）、しかし、主イエスはあえて彼らをご自身の栄光を現わす器として選ばれた。それは彼らを通して大きな救いの業を為すことによって、人間が誰も自分の力を誇らないように、またイエス・キリストの福音が神の恵みであり、神の救いの力であることをこの世に鮮やかに示すためであった。

使徒パウロはこのことをここで次のように言っている（1：26～29）。

「兄弟たち。あなたがたが召されたときのことを思い起こしてみなさい。人間的に見て知恵のある者が多かったわけではなく、能力のある者や、家柄のよい者が多かったわけでもありません。ところが神は、知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるために世の無力な者を選びました。また神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです。それはだれ一人、神の前で誇ることをしないようにするためです。

パウロは、他の箇所でもこの神の恵みの逆説性を語っている。「わたしたちはこのような宝（福音）を土の器の中に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために」と（第2コリント4：7）。また別の箇所でも、主イエスの御言葉としてこう伝えている。「わたしの恵みはあなたに十分である。（わたしの）力は弱さの中でこそ十分に発揮される」と（第2コリント12：9）。

土の器とは、もろくて壊れやすい、弱い人間をたとえたものである。「土の器」と「福音のダイナミックな力」、これはキリストにおける神の救いの恵みとその力強い働きを表わす見事な対比である。わたしたちはもろく弱い存在であるが、しかし、神はこの弱き者、この世の無きに等しい者をあえて選ばれ、また用いて、ご自身の栄光をこの世のただ中で現わそうとされるのである。

瞬きの詩人水野源造さん、花の詩人星野富弘さん、そして慰めと希望の作家三浦綾子さんらの生涯とその働きの中に、私たちはキリストの福音の恵みとその力の鮮やかな証拠を見ないであろうか。私たちの「小ささ」も「愚かさ」も、「病い」も「弱さ」も、その他さまざまの痛みや痛みでさえもむしろ、神がそれを用いてご自身の驚くべき力を現わす機会となることを私たちに教えている神の恵みの証人である。

神の為さる恵みの御業は何と逆説的で奥深いことであろう！この奥深い神の御心を信仰をもって受け止めるとき、私たちはどのような辛い境遇の中にあっても、自分の弱さや痛みを不幸と嘆かず、使徒パウロのように、本当の意味で自分の弱さを誇る事が出来るようになる（第2コリント12：9～10）そしてその中で、苦難や弱さを共に担ってくださるキリストの恵みと力を体験し、勇気をもって生きるキリスト者へと変えられて行くのである。